

## ◎小学生の部

太田玉茗賞

ほたるのさと

羽生北小学校 二年

春山 良太

ぼくは、生まれてはじめてほたるを見た。  
お母さんが子どものころは、  
おじいちゃんがにわで  
ほたるをつかまえてくれたそうさ。

「ほっとほたるの会」の人たちが  
ほたるをそだているときいて見に行った。

「うわあ、きれい!!」

「これがほたる!？」  
なんてきれいなんだろう。

ほたるの会の人さ、

ほたるの紙しばいをよんでくれた。  
ぼくたちが見たのは、ヘイケボタル。  
ゲンジボタルは、むれになるけど  
ヘイケボタルは、むれにならない。  
いねの上をとび回っているのがオス。  
石の上じつとしてるのがメス。

ほたるの「ほ」は、小さいあかり。

「たる」は、星がたれる  
というみださう。  
すごいなと思った。

その時、くもの間から  
まんまるのお月さまがおを出した。  
はじめて見たほたるとまんまるお月さま。  
わすれられない夏の夜になった。

いつまでも、  
ほたるが見られる羽生だといいな。  
来年の夏も、またほたるを見に行こう。

## 宮澤章二賞

### 手打ちうどん

新郷第二小学校 五年

堤 澄心

私には一つ心残りなことがある  
ひいじいちゃんが入院している病院にお見ま  
いに行った時のことだ  
ベットで横になっているひいじいちゃんに  
「元気になったら何がしたい？」と聞いた  
ひいじいちゃんは笑いながら  
「手打ちうどんが食べたい」と答えた  
それがひいじいちゃんとの最後の会話  
結局、手打ちうどんを食べることなく  
天国に旅立った  
春だというのに  
雪のふるとても寒い日だった  
私はおばあちゃんと一緒に  
手打ちうどんをつくることにした  
手も洋服も粉で真っ白になりながら  
力をこめて 心をこめて

そして何よりも感謝の気持ちでこめて  
出来上がったうどんを仏壇におそなえして  
両手を合わせる

「おいしい手打ちうどんができたよ」

「おなかいっぱい食べてね」

線香のけむりがゆらりとゆれた

なんだかひいじいちゃんが

こう言っているみたいに感じた

「やっぱり手打ちうどんはうんめいなあ」

おいしそうに食べるひいじいちゃんの顔が目  
にうかんだ

優秀賞

おくりもの

新郷第二小学校 二年

小澤 陽馬

サスケ 走れ  
夕方の田んぼ道  
お母さんとぼくと犬  
まい日いっしょに歩くんだ  
とおくに見える山  
はすのさとのてんぼうだい  
天気の良い日は  
ふじ山だってみえる  
いつも見ているけしき  
ぼくの大すきなけしき  
おっきなたいようがしずんでいく  
ちよつと目をはなすと  
もう山のうしろにかくれちゃった  
でもたいようは  
すてきなおくりものをくれるんだ  
赤 むらさき ピンク オレンジ

きれいな色で  
まい日ちがう夕やけ  
ぼくの大すきなけしき  
きょうの夕やけは  
ピンクだった  
あしたはなに色かな  
ほつぺたにあたるかぜがきもちいい  
もうすぐ秋だね  
サスケ 走れ

## 思い出いっぱい 家族の家

川俣小学校 六年

大澤 修良登

九十二才の、ひいじいちゃん。  
働きものの、じいちゃん。

おこりんぼうの、ばあちゃん。

手作りの好きな、お父さん。

少しのんびりやの、ぼくの

五人家族です。

家族に、たいへんなことが起きた。

それはね。

ぼくの家は、堤防のすぐそばにある。

土手の補強工事が、始まるという話だ。

家が、土手の下になってしまふ。

うわ！たいへんだ。

思わず、さけんでしまふ。

じいちゃんが、

「だいじょうぶだよ。

新しい所に、家を建てるからね。」

と言った。

ぼくは、安心した。

でも、ちよつと

ひいじいちゃんの顔を見たら、  
どこか、さみしそう。

九十二年も、生きた家。

みんなも、同じ気持ちだ。

ぼくは、まだ十二年だけど…。

自分の部屋を見た。

かたすみに、消しゴムのかす。

柱のきず。

ジュースをこぼしたしみ。

どれも、なつかしい。

もう少しの間、

この家に感謝し、

毎日を過ごしたい。

## おばけトンネル

川俣小学校 五年

村山 鈴香

毎日通るおばけトンネル  
どうしておばけトンネルと言うのかな  
おばけなんかでてこないのに  
お母さんもお姉ちゃんもお兄ちゃんもずーつ  
と  
通っていたけれどおばけなんかでなかった  
ちっともこわいことなんてない  
なのにどうしておばけトンネル  
近くにおはかがあるからかな  
台風がきたり大雨がふると水びだし  
急にふってきた雨には雨やどり  
暑い夏の日にはすずしいのでひと休み  
上を電車が通るとガタンゴトンと音がひびい  
て楽しいよ  
いつもみんなで通るとわいわいひびく  
一人で通ると静かださみしい  
昔からずつとその場所にあるおばけトンネ  
ル  
少しづつキレイになってきたよとおじいちゃ

んおばあちゃんは言っている  
昔のおばけトンネルはどんなふうだったのか  
な  
よく見ると今のトンネルもコンクリートと少  
しレンガでできている  
レンガの部分はすごく古そう  
昔からあったのかな  
これからもずーつと通るおばけトンネル

## 奨励賞

### いろがいつぱい

三田ヶ谷小学校 一年

新井 瑠杏

わたしのまわりはいろがいつぱい  
まどのそとはみどりいろ  
いねがおおきくそだっている  
はたけのなかもみどりいろ  
きゆうりやえだまめがそだっている  
ときどき、とまとのあかやきいろ  
なすのむらさき  
はたけのなかがいろえんぴつみたい  
にわにはきいろいひまわり  
そらには、しろいくもとあおいそら  
そこに、ぴんくのようにふくをきたわたし

## おはようトマト

井泉小学校 六年

小澤 碧羽

夏のまぶしい日ざしの中で、  
真っ赤にキラキラ輝くトマト。

私の大好きなおじいちゃんが作った、ミニ  
トマト。

畑に行って、つまんで食べた。

あまずっぱくて、ほっぺたが落ちた。フレッ  
シュな、青いかおりが広がった。

つめたくなくてもおいしいね。

土のにおい、草のかおり、風が流れる、深  
呼吸。

深く息を吸い込むと、不思議と気持ちもス  
ットする。

不思議、不思議、不思議。

ねえお母さん。

畑の中で、食べただけ。

どうしてこんないい気持ち。

青く、高くすんだ空を見てつぶやいた。

おはようトマト。

## ぼくたちの散歩道

羽生南小学校 五年

関根 快

「ミーン、ミーン。」  
母さん、ぼく、弟、犬一匹の散歩道  
せみに かえるの大合唱  
高く高く  
広い空を  
ゆうゆうと飛んでいるトンボたち  
夕焼け空が おにあいだ  
虫取りあみをもった弟が  
まっ赤にそまった空にむかって  
走って行く  
小さな弟のかげが  
大きく長くのびていく  
そのかげをおいかけて  
ぼくも犬といっしょに走っていく  
弟がぶんぶんふつてる虫取りあみを  
ふわりふわりとすりぬけて  
遊んでいるみたいなたんぼたち  
弟にたくされた  
虫取りあみをにぎりしめ

トンボにそっと近づく ぼく  
ぼくのつかまえた  
トンボが入った虫かごを  
大切に 大切にかかえる弟  
お母さんと目があつた  
お母さんも につこり笑つた  
のんびり楽しい散歩道  
ぼくの大好きな散歩道  
夕焼け空を見ながら  
三人と一匹で  
家に帰ろう  
「今日の夕はん、なあにかな！」



## まわり地ぞう

川俣小学校 六年

野村 優斗

今年もぼくの家に来て来る。  
年に一度やって来る。  
小さい頃それを見て  
ぼくは怖かった。  
でも今は怖くない。  
よく見ると優しい顔をしている。  
去年の夏、ぼくのおじいちゃんが  
天国へ行った。  
おじいちゃんはとても優しかった。  
なんだかおじいちゃんの顔に見えてきた。  
毎年おじいちゃんが帰って来る気がした。  
だから怖くないのかな。  
だから優しい顔に見えるのかな。  
だから見ていて、いやされるのかな。  
なんだか不思議。  
見守られている感じがする。  
今年からぼくが次の家に背負って届けよう。  
そんな気持ちになった。  
これから、いつ家に来るのか

待ちどおしくなるだろう。  
それは、おじいちゃんと重ねているから。

## おじいちゃんへ

手子林小学校 五年

福島 尊翔

おじいちゃん

天国で何をしていますか？  
大好きなお酒を飲んでいますか？  
プロ野球やお相撲を見ていますか？  
ゴルフをやっていますか？  
ぼくのことをいつも見てくれますか？

おじいちゃんが一月に天国へ行っちゃって、  
ぼくは悲しかったよ。  
おじいちゃんが病気で戦っていた時は、  
痛そうでした。つらかったし、  
苦しそうにしていたのでかわいそうだったよ。  
今はもう痛くないですか？

おじいちゃん

三月でぼく10才になったよ！  
いっしょにお祝いできなかったけど、  
学校で『1-2の成人式』をやったんだ。  
十年後の自分への手紙

何て書いたと思う？

「頭を使う仕事がしたいな！」って書いたよ。

大好きな『一番星』の群読。

ぼくの出番は「仕事が大好き一番星」

合奏のプレゼントもしたんだ。

毎日練習した『宇宙戦艦ヤマト』

楽器は、けんぼんハーモニカ

おじいちゃんにも聞かせてあげたかったな。

いつもかわいがってくれたおじいちゃん。

「たける！ たける！」って呼んでくれたね。

もうその声を聞けなくなって残念だよ。

もっともっと、話がしたかったな。

ぼくのことを見てほしかったよ。

20才になって、いっしょにお酒を飲むことは

できなかったけど、

ぼく、がんばるから、

今度は天国で見守っていてね。

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
ホテルの光	井泉小学校 四年	飯塚 皓耶
おじいちゃんのおじ	須影小学校 二年	江原 知花
ザリガニつり	川俣小学校 二年	大山 修弥
「愛宕神社」	新郷第一小学校 五年	柏瀬 有花
とねがわ	川俣小学校 一年	須永 理央
天神様	羽生南小学校 四年	瀧澤 さゆり
約束	新郷第二小学校 五年	萩原 一帆
ひやじる	村君小学校 三年	平井 尊琉
かぶとむしのき	村君小学校 一年	細井 大暉
一本のスプーン	羽生北小学校 六年	堀口 真祈子
おじいちゃんの作るお米	三田ヶ谷小学校 六年	松本 成生
とうぶいせさきせん	手子林小学校 一年	三牧 莉奈

## ◎中学生の部

太田玉茗賞

ただいま

東中学校 三年

志賀 聖

久しぶりの外は雨だった  
右足を手術し入院していた僕は  
退院の日を迎えた  
包帯のまかれた自分の足を  
雨からかばいながら  
車にのりこむ

流れてくる音楽をききながら  
僕はぼんやりと  
雨の降る景色を眺めていた

「そろそろ着くわよ」  
の母の言葉に

ぼーっとしていた僕の意識は  
見慣れた景色を  
しっかりと とらえはじめていた  
自分の記憶にある  
自分の知っている風景が  
車のスピードにのって流れていく

角をまがり  
敷地の入り口が見えてきた

車はすーっと車庫に入り  
松葉杖の相棒とともに  
僕は車をおりた

「ただいまー」  
玄関に手をかけ 家に入る  
全てが入院前と変わらないようすで  
僕を優しく迎えてくれた

懐かしいこの感覚  
家族の「おかえり」の声も  
心落ちつく  
いつでも いつまでも 温かい  
ここは僕の安らぎの場所

宮澤章二賞

ふるさと語り部

東中学校 一年

小林 茉莉亜

祖母が毎朝聞くラジオ  
戦後七十年特集をよく耳にする  
ふと 祖母が記憶を語りはじめた  
私は タイムスリップをしたかのように  
吸い込まれてゆく  
幼い祖母は 上空を飛ぶ黒い影に怯えた  
メガホンから叫ぶ 空襲警報  
慌てて防空壕に入る  
解除の声に 安堵感も束の間  
再び忍び寄る黒い影に怯えた  
「歩き通せない。気の毒だけど仕方ない。」  
四才の祖母は 覚悟を決めた  
私は胸がしめつけられ 涙があふれ出た  
祖母が生きていてくれた事に  
心から感謝した

ふるさと羽生の過去を知り  
平穏な日常を いとおしく感じる  
快い目覚めに 太陽の光を浴び  
食卓を囲み  
祖母の聞くラジオに耳が傾く  
通学路の並木道を 足早にこぎ  
全身で風を受ける心地良さに  
胸が踊る  
当然の日常を 新鮮に感じ  
私は ふるさとで未来へと期待を膨らませ  
生きている  
命のバトンを つなげるために  
次は 私が語り部となり  
命をつないでゆく

優秀賞

楽しい食卓

南中学校 二年

伊藤 いずみ

少しだけ寝てしまおう  
おじいちゃんちは時間がゆっくり  
流れているから  
気持ちが悪まる

おじいちゃんちでいやされたから  
さあ、明日もがんばろう

いつもニコニコして  
私の話をきいてくれるおばあちゃん  
その日の出来事をききながら  
おいしそうにお酒をのんでいる  
おじいちゃん  
みんなそろって  
にぎやかな夕ごはん

嫌なことがあった日も  
おいしい夕ごはんを食べながら  
たくさんしゃべってしまおうと  
食べおわる頃にはすっきりして  
いい気分になれる

おなかいっぱいになると  
安心して眠くなってしまう  
だから、たたみの上で

## 桜を見上げて思うこと

西中学校 三年

島村 和希

家の近くの散歩道  
桜の木々が立ち並ぶ  
幼い頃の僕と母  
いつも一緒に座ってた  
桜の下あのベンチ  
犬を連れとおばちゃんや  
歩け歩けのおじいちゃん  
僕らの前を歩き過ぎる  
桜を見上げて思うこと  
今年はいつ頃咲くのかな？  
だんだん蕾も膨らんで  
ベンチの人々、数を増す  
年に一度のお祭りを  
だれもがみんな待っている  
ちようちんつくのを待っている

今ではほとんどなくなった  
桜の下に座ること  
それでもちようちんともるころ  
母がみんなを誘い出す  
お花見行こうと誘い出す  
桜の下では人々が  
楽しそうに笑ってる  
月に照らされ満開の  
桜と一緒に映ってる  
ちようちん川面にきれいだな  
今も昔と変わらない  
桜の下あのベンチ  
座る人達変わっても  
近所の人の憩いの場  
時が過ぎたらまたいつか  
僕も再び座るだろう  
桜の下あのベンチ

## わが街のお米

東中学校 二年

戸山 大輝

春になるとあちこちの畑からゴゴゴオーという、大きな音が聞こえる。田んぼを作る準備だ。僕の街はお米作りが盛んで、僕の家もお米を作っている。

苗箱に土を入れ、種を撒く苗作りは、僕も手伝っている。この土の匂いを嗅ぐたびに、僕はこの季節が来たなと毎年思う。祖母は毎日苗に水をあげ、自分の子供のように大事に大事に育てる。茶色かった土からもやしの芽のような顔がニョキニョキやがて立派な苗に。さあ田植えだ。家の周り中が次々と絨毯を敷きつめたように緑色に。このかわいい苗たちが、太陽の光と羽生のきれいに

な水と、農家の人たちの愛情をいっぱいに浴びて。どんどん成長する。スクスクと上へ上へ。根っこは大地へと深く深く。台風にもスズメやカラスにも負けず、強くたくましく育った稲は、この時期になると黄金色になっていく。成長した稲は合図を送ってくれる。大きく重くなつた稲穂を、サワサワ、サワサワと、風に揺らしながら。

今年もたくさんお米が獲れることだろう。獲れたてのお米の匂い。炊きたてのご飯の匂い。僕はたとえどこに行っても、この匂いを僕のふるさとの匂いとしてずっと忘れないだろう。あの土の匂いととも



## 奨励賞

### 藍のまち

西中学校 三年

青木 優奈

私のお気に入りのハンカチ  
藍で染めたものだ  
私が小学生の頃  
独特なおいの中で  
決して上手とは言えないが  
色の濃淡がともきれいな  
青ではなく紺でもない  
古くから伝わる藍染  
私のおばあちゃんも持っている  
藍で染めたハンカチ  
少しうすくなった藍の色は  
とても味がでている  
受け継がれてきた伝統  
変わらない染め方  
技術が進んでも  
藍染はなくならないでほしい

ハンカチを見るたび思い出す  
染めた日のこと  
大型ショッピングモールに  
藍のハンカチ  
身近な所にある  
わたしのふるさとには藍のまち  
藍のまち羽生

## ほたるの光

東中学校 一年

神田 大介

ほたるの命はとても短い

一年間土にいたのに

七日間懸命に光ってまた土にかえってしまふ

祖父や母が子供だったころ

家の裏の水路には

あわい光が飛びかっていたという

その光が本当に消えてしまうとは

その時はだれも思わなかったという

消えてしまつて初めて知つた

水や土が汚れていたこと

そしてほたるは姿を消した

家の裏の水路から

祖父はそのとき決心したという

孫にほたるを見せたいと

きれいな水を求めて井戸をほり

自然な土を求めて無農薬とした

幼虫をもらいに山村に行き

育てかたを教わりに足を運んだ

地域の人とほたるを育てて20年

私の生まれるずっと前から

祖父たちはほたるを育てている

大雨の日も日照りの日も

心配して様子を見に行く

水路や田んぼにあわい光が点滅し

夏の夜を彩るために

今年の夏もほたるは光った

いつか今度は私たちが

あわい光を守つていこう

次の世代に残すため

## 残心

南中学校 二年

清水 健太

真夏の炎天下

ぼくは自転車を走らせ

今日も部活に出かける

膝の痛み アキレス腱の痛み

そして暑さと疲れ

今日は部活を休んでしまおうか

そんな時

胸をよぎる恩師の言葉

「力をもったいぶらないで

全部使い切れ。

そうすると 少し残るもんだ。

加減するとかえって疲れるんだぞ。

バケツの水を残そうと思つて

そろそろと捨てるよ 一滴も残らない。

思い切つて捨て切ると

水は残るだろう。」

竹刀で相手に打ち込んだ後

もう一度構えること

それが残心

残心には二つの意味がある

一つは打ち切ったと思つても

決して油断をしないこと

もう一つは結果は気にせず

力を使い切るということ

暑さ 疲れ 体の痛み

試合で勝てるのかという不安 恐怖

いろんなものがモンスターのように

毎日ぼくを襲ってくる

だけど ぼくは決めたのだ

剣道を続けるという道を

一瞬一瞬の

選択の連続で

人生は変わっていく

「残心」

たとえ たおれたとしても

ぼくは日々

全力でやり切つてみようと思ふ

## 故郷の風は

西中学校 一年

戸ヶ崎 結優

故郷の風は私にとって  
とっても とっても  
特別な風

暑い夏 部活帰りで自転車をこぐ  
その風景は 一面の水田  
青々とした稲  
実を作るには  
私と同じく  
まだまだ未熟

失敗ばかりの部活だったとしても  
涼しく頬に当たる冷たい風が  
つかれた体を癒やしてくれる  
ささやきかけてきてくれる  
空も応援してくれる  
それらに私は励まされる  
絵に書いたような風景が  
私をいつも迎えてくれる

中学校もまだまだこれから  
楽しいことがあった時も  
悲しいことがあった時も  
いつでも私を迎えてね

故郷の風は私にとって  
とっても とっても  
特別な風  
かけがえのないものだから

ずっと ずっと これからも  
その風で私を癒やしてね  
そして ずっと いつまでも  
その風で私を支えてね

## 僕の好きな場所

東中学校 三年

福地 晃成

期待に胸ふくらませ入学した中学校  
あれから2年と数ヶ月：  
あつという間に時は流れた  
小学生のころ僕は野球と出会った  
そして野球部に入部した  
初めてグラウンドに立った僕は  
緊張で胸がいっぱいだった  
偉大な存在の先輩たち  
厳しさの中に愛情あふれる先生  
僕は大好きなグラウンドで  
毎日練習に励んだ

草取り、グラウンド整備、雨の後の水取り  
仲間と一緒に走ったグラウンド  
毎日全力でサポートした先輩達は  
華々しい結果を残し、引退した  
最高学年になり僕はキャプテンを任された  
不安でいっぱいだった  
しかし仲間が支えてくれた

毎日がむしやらに頑張った  
地区大会で優勝し、いざ県大会へ  
しかし、健闘むなしく初戦敗退  
もうこの仲間と野球ができないと思うと  
いろいろな思いがこみあげて  
涙があふれた  
学校にもどってきて  
今までお世話になったグラウンドに  
仲間と共に、最後のグラウンド一礼  
心を込めて  
「今までありがとうございました!!」  
僕たちのこの思い、後輩たちに  
受けついでいきたい  
僕の好きな場所、それは学校のグラウンド  
たくさん笑って、たくさん泣いたこの場所  
今までありがとう  
また数年後、仲間と再会して  
このグラウンドで野球がしたい

## その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
小さい花	東中学校 二年	青木 結香
暑い夏	西中学校 三年	石井 結
庭の雑草	東中学校 三年	市村 瑠唯
この町の猫	西中学校 二年	角田 実優
祖母から母へ	東中学校 三年	北林 美路
羽生の言葉で	西中学校 三年	関矢 花鈴
ずっと一緒	東中学校 三年	福田 あみ
サケの放流	東中学校 三年	増田 花恋
真似できない底力	東中学校 一年	増田 凧紗
最高の仲間	東中学校 三年	矢崎 めぐみ
蝉の鳴き声	東中学校 三年	横山 拓実

●第十一回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部            1, 235 篇  
中学生の部            786 篇

応募総数            2, 021 篇

●選考委員（五十音順）

小 暮 恵 子  
塩 田 禎 子  
根 岸 光 子  
萩 原 澄 江  
水 野 栄 子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 平成28年1月15日